雪ふくし月もあらて富士すゝ秩父
雪永さの雨やしれもん
今日まて宇ほの山をこえはるゝ
立つるさつほの山ちれほしきて
夕つゆふる旅衣
てうやおやおやお

大井川を下りて

おもかげよみやこの雪のおもかげも大井川
水路うちてもろくこんやすらふ
不二ちかの中山の雪海をお見ろす
見ゆるをやーやふるねは
又ほのぐ富士の高嶺
廿三百氏國の神をうけ富士の宮務めりく
鳳の沼はるをぬきく杉木立
ゆするの千せをうけて男もろ

富士の人穴

富士の人穴ありときゝて行てみれば
めぐりなる岩ほいかめしくて
旅ともなきひのみじ
又ちかくかゝふき松あり木をもれ松はまろくと奥
なる松ふり人ホやしはべれ八百年ほど経る
侍るとぞいせうあが杉木立ちかば
おきふさし入けり孫のかなは
さいく杉のこゝをへめぐりかは
まろのはよりくはて成りかは

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

富士のよせ書

[illegible]
[illegible]
[illegible]

いねほうとうを見る

月日をば山田なりねるほうとう
年ごとにおくつゆをやおほうらん

かりそめの酢もて

秋さむし葉ほうほうのかや井戸
我のみぞ風なるる

さめ井やかわうそ

冥う代はろう焼き
こりわくもつまごとそ思ふ

をおとり不二の紅葉を見行きて

旅おろもみちのくもやりあて
しゃれもまみやかなぬん

あつさのせきもこう

ま人は生せされ名のおほさろ
多ふ神め代はろとかるふし

武者の宿つまごとして

わろれ師代をおさむる武者の
名を呼里ともはうろ利

これ師やり出て師匠を祝ひ作
若松み松ふやまる代の秋うまく

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

富士御覧日記

釋　宇長

永享四年壬子九月富士御覧の事同十月二日京都出御
同十七日還御事

注四位階範改

君うごんりふのたあやもつてよ

つもりいてる　不二のそ

十九ろくにうこ

ゆるさみまうみの

雪と一つのもまこ

四之二

これあの雪をたてねにあ

みもりる

みぶ頑

月ゆきの一うあなのゆ

みもうまぶ

四之二

月雪光りをへくみのね

うこまあま世のをそせて

月廿雪後

あくみのみのねあ

わすれをりなこ

四之二

空雪ぶあ一おりそれて

範改

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

○正廣日記　今大成集

釋正廣

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

○ 東下の記

天保三年辰年春三月廿日ばかりを行末はやく
とく

さらでも此の頃は京の花都ぶりかなし
急ぎのぼりこそかつ〳〵行きもふこうろくさきの
あまたみえ行きもうは
へ〳〵しく物乞ひ行きもやまぬ物から
なほ、うおふ打ち過ぎて行く時の
おもをてへやせう〳〵行く程に
ふりなき事里一ものうるの海の
月のさし松のふかき〳〵行きうは
みさとの作れるかりまくらんや
あの小舟えこぎ
猶ふかうみえ都そ
おこのひいなのさうびをかざりもあり
年ふるうち行きて
はるかに大井川をわたるとあや〳〵

○富の曙

仰と法師

廿日四の時ふつゑを引いてんをつりかふなるめ行てなんらくさの
後口ゑまふ打つゝきとのはゞあきまふ了けても
打出くるまにおもひ里よ海やみのうるの雪ゑとのは
此夜居ゑまふ止初を
ふのゝの行ゆうしゝ居んう雪ふゑうけ仮の上の月
廿二日夜十ゑまを
月雪秋ふの二ねの文まく訪ようねゝかゞ社更
世三ゑ家をおくゝ初ゑれそ教ゑまふよゝゑ雪ふく
とひうりあくう

日四廿ゑ二まにかやきくくふ
症状ゑまを思ふとそ
雪ゑ廿ゑの二ゑを服ゑ打てこゝろ心ふうまし病ゑ来
日訪しの時ゑ中井ま庵医家ゑまて月沙の長ゑの
これをやゑのはりぬ口ゑる此夜あるしそ三ゑの時神
ゑまふう原玉植ゑる共ふのうくまふ家ふおろみそれば病
本社お海をけ一ゑん来社とろくふへ豊授病ふくろへ
なう二日門の前ふ泥ひろくしこなるへ石を秋ゑ
共ゑへくくぼ原木枝ゑろくてくろうく杜木ふろくてくろうく
しまゑ泥ゑう此社月矢四訪の行ふさいめへて富ゑ

富の曙

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

富士のよせ書

（扶桑拾葉集）

東海道記

都の前大納言雅兼

旅衣の中山まで行く時、富士の山を一見せんと思ひ立ちて、東の空ながらうち眺めやりたるに、雪の降りつもりたるありさま、十月ばかりの心地して、おもかげもかすみわたりたるに、夕日のうつりたるほど、いとあはれにおもしろく見えたり。

富士の山をみやこのつとにせよとて雪のかたみに包みてぞやる

富士の山をみやこのつとにせよとて雪のかたみに包みてぞやる

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22　　ガラス使用

宝永四丁亥年
宝永四丁亥年

○東園紀行（天和三年）　宗牧

生年宗牧老人みやこより
東国遊覧の思ひたちて
西海よりかへるをりふし
ふの雪をそれまの里
なれし都のそのやうも
神の月　新しき
和歌の浦をへまもなく
山ざとと作りて
まもなく覚えおぼえ

東国紀行　宗牧

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

○富士紀行

七年永禄の春も十ふつのもの久しくさなから
不二ゐもまもる物ふるいらつるよの
男ごゑのおもかるとおもたりてそうしてこと
らもあれて

たひえのまさごいくたの雪
四十三百富士浅間社詣ての
のぼりそるあの名の雪仕給ひて
三ケ雪両度往候都のを
ありせのるるまもとそものて

富士紀道秋色

遠情細帆もさのをけしそ
月数多にうつるれい

むさし野のなひくすすきをそ
もそそにうすむ山ふのね

の宝村此
梅が世なりのうりの匂ひら
当住三俣松山息を花・葉の

△従見院殿迄墓記（天正十年）

此家年来富士山の一名の事

駿州葉三国を双の名山なり

富士のよせ書を著すこと

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

ありま通記（校異）（拾遺集）　春宮大夫

初冬や京のみて富士山秋部公の一幅を写まねて

六月の雪京ほどきえやすき夏の大空

雪ふきく例となりや杜鵑

如月の空

あしくらべしてもみまほしてんぐ岳

角うけのある富士の山ばと

皆人の言草までの名ものがれぬ

花見ごろふきあれの山のそら

清水にてなすえぼし歌あり四季ともにあれども夏の題の記（光廣）

三年さきは春よろ[illegible]

姉の祢宜なりこはゝふ[illegible]

五月雨の頃山のふもと

心あるふる事やなこなん[illegible]

ふもとの[illegible]をさくらと

玄八年さきのふる

白妙の雪ふまよき富士の祢

たらねふる事もの

秋ふきさはふよめる

何事もふる村のふる人せ[illegible]

山をゝきはの姉れ

空の海をさふ富士の[illegible]

塩干ぢうちふふとゝ[illegible]

冬十六年以おの詠

時ならぬ月のふねの雪

冬ふ我山の[illegible]

十餘年さきの歌会ふおゐる[illegible]

田子の浦を詠ふ[illegible]

田子乃あまもんやふ[illegible]

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

ありし北山を見れば雪ぞ降る
そなたの峰に雲ぞ重なる
いにしへ
いりまくをものぼりを待ちの
ふもとの雪ぞ下りくさ
おろくそくとへのよそる
東路の旅のすさみぶなぶも北な
やまそろそれ乃ふ雪ぞ降ぶ
雪氷閉ぢ雪を日暮ぶまぶ

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

○澤庵和尚東南記

出小田原上笠根山路境筆勝嵩眺雖三十里漸臨湖水見之竹高峯頂行旅亦何難直入寺則主山繞寺山峯蒼鐘聽空谷樣觀列淡心親覺身是到乱宮城山隈在許村行以御角駄入麓則湖水遠前寺峯影寔艸壮觀也

遠到笠根山轉重　千年古寺暮依鐘
影吐湖水有奇觀　担夫衆拭上士峯
塩なるあをこの海のそこの水　汲みてなるらめや塩を出てなるらめや
十言余りや
東関記

中山あたりにさよ姫と申すにて
うつそみのあるかなきかの
りんとうとかねてこころもかけもいさて
おしひやとおもひそめしは
かりそめ
わすれてもわすれやはする
富士山高在大和　中朝五嶽亦如何
奉臨東海所以　万見漢苑雪一叢

去歳見富士作令記于此
直上雲旬環落雨　千秋積雪擁東扇
月明夜若望無影　富士峯前不見山
僧正尊海

あづまの海記
さまざまの山をうんじ出せる通る事
みるなるふしの里あれをおふ事を
をかしく侍る
家うりやさんかりまくらかたしく
おもふ事のあるにあらけをいつけはいと
くるく

おしまやうでもあのやうでもなく
○遠江くんだりも今程好て居まと云ふ
　松なくなるとより近まりまる
○御つとめて居ることきのおもしろ
　旅でえまくはまいりのねをとめ
　ちりはてるとり（まち松え）
○新道紀行
山中とふおとり川えとう
　きのふ今日のくるふいまくまを（まち
　ちりはてるとり（まち松え）
　あまりえんおへいうまくらいひとう名ふ

　　幸祖長二

田のうえより川をえくく
　うち出てそうりいしふのねをえつてそのまま田の畦系
　　鳥光栄公
○関東道北記
青まうもうみとの村まくる程ホ平郎川ケまかち人の後ろ
と学てまることを三里で村川筋をえれば人あまっていうう
ちうくは田を川原のひうくえくてまふ人北うまも
さうしんまでりとんやうくいまえはてしおまを行ホまり
ホのうホかこの和はえてあれうり人
高名物のまく一応のまれかくらぬをえん
村や各ろき山と各こうまく人のもうし
　関東道の記

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

ひらくるもさまおれぬ

あふさかの関のこなたにいでて春秋のふ

○東海道之記

小堀政一

廿五日晴天なりとくく風も科立ち三島社を過ぐ〻の初ふる雨前砂ふきらけ歩かふしかるに供さまふらふ人のくらきしまうちとまとふをきいて御あまりふる雨を着ときさむへきらふも打とまりをそ初とさへ思ふのふれへ風雲ふるの生涯るまとおもふをく

住をそんやとはいつこまで傍のまるまを水久

まなる雨のふるの風ふるれてたへうたすのまりか

かくふ

むさうあるふにあるをうけて大風ふのぬつ〻のて宮ゆし雨をうくおもしてはまきふかやうくうまふをきてまふさまの雨を出で富士の着始時休息つ風ふつまをまきてまふさまの雨を出で富士の

雨師川の辺ふつきぬてまりはやふ白雲山をくふくまをまとまふの祓所ふれるふまふ雪一郎まこまとは明ふいふくまふ帝気とまふのべかふをりふ友とまふふの吐山を都す

ふてまふまふ雨をふまふふの雨を都まり女ば

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

まだ山ずくめなるものを見て富士男と云ひ

わが国のさくらぐさんの花乃ちり

はてぬひまやあるらん

はつ春を九重の山や住らんと

思ふて

○ひつまのひの花　春草寒毛

十里大いそを出てこよいとふつちふみつ乃里たと

ま乃富さをろ乃の里をいてたち出るやのさなりて

ろそん

まゆのいまくらやしら雪乃

みねをそつ乃の里乃

富士を神津の島とやし浪とを

雪とをなろしてうくまやとまる

いるやいふをものをあろ

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22　　ガラス使用

○将軍家御参宮紀行

○北国紀行（寛文七年）

○東国紀行

○東国陣道記

○東国紀行

将軍家御参宮紀行の北国紀行の東国陣道記の東国紀行（敦通）

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

すて給ひふじの山とも雪をうちけして
よそもろこし富士の山とも天の原ふりさけ見
つゝ
富士の野山とて天の原ふりさけ見給ふ
をろがめて
さゝ初ものは秋ながらゆきの気さえて
もみぢおそろきふじの高山
雪のうちをるくとろえやりてよまる
ふもとよりちさとの庭はくもりつゝ
東園紀行（敦通） 回国記

やうこそはおもはすきあ川をうつしてふじの山をそれいろ〳〵なのばせるたゝ
名のみにてうきやうきやの
うたるふしのたゝ
五月雨の頃やつるらん陸奥にて人
富士川をこす毎に
くてもるをこひらにさとゝのれ論して
侘
うきしまのはらをたゝくらんあしたの山をやり
あしの下かけを通す三五いかふとまりぬ

△○丙辰紀行
武藏野　林道春

圍野凡名称武藏、尋常旅客宿粮、兩餘草色連天地
郊外雲烟浸邑莊、富士雪遥花柄小、筑波陰茂蒼猶長△

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

○富士詰（日本紀脚文集）

貞享癸亥（ヒノヘ）孟陬（ムツキ）上旬仁杉大業寺も枳を住侶雲をあめ初
こゝをよけん界をかそふる吉文ありとて鶴峰の教を先ゝ迄の
陽ふ（ツヅ）摂（ヲサ）もらせ日出ぶ（ヅ）ふ（ヅ）と手掛走の里つゝく下雲ふ一揮遠おそれ
ず芝路木立ふ人怪竜ら馬場を過ぎ步ふみかゝる里中雲師
招乃おて砂浦の茅屋を風をめぐらし
かゝりふく秋野りや如ら富士
ほとゝぎす岐（キヽス）お玉ふとはり郭を担風せば茅根の秋水を流ふ
雲霧を如まくるれば空陰の雲響
おもとふ思い操志心ぶ（ヅ）ふ中（ヨイラロ）の陽風ふ仏ま紀あぐり

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

九川八海諸所の御見神阪八柱をつかさはぶ一座まします
先比山の開始はいとかしこき聖君孝安天皇九十二歳を月一歩
のすゑ江海の四の湖海出て雲浪吹ちる山の南峯多数と生出
多り之河き八峯の不復不留命の境を歩み給ふ後の角
仙神話をう伝承て大照天神の御魂神魂命神魂命
氏姓の命則比河山の和主多り啓日天降むと和主大小と相合事
の中指を神の御堂をさゐの中極の和座ひそ一方指一天
玄の降給ふ時の時魂をうち授まつる事一天息を脇申
内降の大御魂と全ふ正勝ま給ふ錦一人息を云えて自

五運の神一座の宝鏡おろし一日大伴一殿乃神金乎心をて祝
詞初てつぶやき神の聖給ふ事一めせと神をのおくりまつる二拍手乞
三秘の神あをおろ可西眼の光をひそまつる事一時の後を聴く請ふ
金輪廣厚吹ある神風をを時の煙塵をふりとるま
枚除けんうき如雲へ吐いて雷神なりうち怖く
早駆ふ雲降雷の奈落ちん大郎の捧げ賢る弓矢迅けん
出塗潜電ルのあるもきこえず地雷ひらきの日和ふ水大
の境杭雲ひの根乃大ますて弓張恨金鉄の本挟七金刻の傍
鉾をを振一めり勲功の言葉を絶ぬ車の左の引板を鳴
て神の門奈とろん陰翰鏑と弓弦(ツル)倶鞆(トモエ)を振給ふ

富士詣(三十段)

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

を圓生樹木(ヨセカテ)先(ツリイト)大勝を徐の窠(ハナゲ)純をのぞん棚僧を胆深玄琴
山僧を案岸おの言てー双普賢駕のの瓢たる白足神変の猛鳥
ホ斡(オレリラ)鞘なきて御するル調て先独りを供なまを雲慢を通途ー
陸しは離を鳳角を投び拾しもはるめりと現の如狂てる
圓信性師の孔子もひく陸等のけり空も抜へてことおうー日
性市おてまいもるもれば
凡もなびく思いをふる嬢つけん多線の寒士の子根ヤ
又雲をうきさむけて巻を抱るホ
男士むらや雲をひ抜けでお士角ヤ
是よ事も久い駱河の映岬。ヨ天狗の羽風ふ動く村を乃

勉(ハナミナ)学個等廣通ホ階段易騨
よ(セおる)ちて直なるもおかりー各女
ホ二何の棒を投りまるる魅(セニザヒコン)の鰊をふむと解て教ヤ
五月ふる生捷とうめてかつばと起なり時との正息ホ曲輪と
嬰ア吐とつく何宮の主山領大日の山嶽ちつまぬ信ち眼前の松山嶽
柱集郭四不二門の前ヨ平集ー称の名秋光の新くる面像
る第ふく神佛称会郭一座の実験山ル止ホ善根
の業ハ日業処の三如来定理験ふして利和の事雪情ヨ事
ろく魚香実相の中空ヨ本有の真神常見ふさうへヤ尼
元年の下宮ヨは日塾(じじ)の務へぶつ実ふ列ー生種をおふホ

富士詣(三ケ月)

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

一座の拾ひまもるく玉めをろの胸もなは一発の怨恨うてれしおは
復眼ホ一路をれば空切れなりて東都を狼と見る（牙七）批を狗
賀と島驕く覚悟の衆の前まは三陳の松ろも七里宝樹ろう
田るの俳諧もハ切性ゆひと是非当ホ一心乃変化ろれなどう
是相ろうぶくんと歌妻の小眼すこれを見北な出松は孤雲
の室歌を旧巴く峙虹は陰日の来迎をまく世く神女白（うと）雲をも
べりて雲夢を是ホ多舞婦神言とはも竜をおりて空玉園ホ
ぬり花の曲をろ任日大仙永雪の肌は珍琳と指尾を吸ひ白露
を舷め桃梅の空ろは人中の獅子を追さまホ進み仏上の鳳凰
招子ろろの降る寸光の眠ホ多却の又をろるつく寛ホ業作

乃一空は神箱をはらりて理所の指図を出有相乃方物は
方便を得りて成就の色形を現をさ水ば梅柳（カブ）梅未ホ月集
を刻外是光ホ灯ひをの実番ホ梅書をくまぶる是来陰
ひ信所の内地ろは心御ひくやかいその是は変化の面月
悔信和尚第廿来迎仏はは時ねうとう陰ろんと感儀の
涙神ろ流をろうやいをまれ付水を天ホ物朗の観祢
尽なら水てやさい理通等述の数風ホかくをろ亡ば
宝雪の良材なろるく机筆ねる久寛なりホみちくなり
悔や私ホの二野ホ入せらまりはは名を陰の秋秋ろげ
此是寛ホ聊をひ賀を風賦此の梅桃まも事をかずも

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

おもひ設けし秀逸の六仙をさすらぬまでもあらば撰集の跡ぶくろを指てあれおれの心を明け真雅僧正の雪月花時ずれ勅ふ老えんものを吹て迫を待とも心あるねど海を窓みこもる帆のうちう揖飯とも出で雲だもも足白つさー出ふ伊豆の海や懐(うき)の小島の雪陰より雲無月なのくと見お跡を悔や恨(うら)む人はかくぐ果て多なの狐のごおはまず悔ふおりふめ悔ふ差で鞠と鼬くふけひとり文睫とて念珠揃(つづ)り咒風ふ横雲ひきふれふと投り曙ぱげきやいうまくきふいの見悔ふ恨ぬ新ふてく潤と男ふりふ生ふふがほもふく雪ふ極性さ悔ばゆきさ悔は恨涙の輪を吸ひて天瓊鉾ふ性ケ丑を

ふくふると思ぱる九天はるかの紫冥ちで見医ふー鳴呼ち凡富ふ白扇はみふれあの雪ふ再も富士を拙ふをひく

雪ふの文目ふれ霧士を今ふて夢と我思ふ雪の曙

信ふ雲ふり雪ふ記ふれ二三のまの迫次を後ふてこのちまた

かく足三つ二物ふいまふ砂ふひつくか向の後社ふ俗ふ心

元ふへ思くて仁形の箱方ふ信さぬ見ふーきはづなまえ

輔(ふじり)を世ーにふのくふびきふ秋(ガ)の指(へ)ふふ生天瑞御ふまを彩さへ

思ふ(下裏) 貞享三旦真ふ湖山老教人富士亜 三千風誌

紫ひとり夏山白ー富士の尖秋 永弘

くふるま饒ふ痛ふ洗りぬる富士のふふ凡ふん 同

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

環翠の餘

和泉小次郎富士の根引きとて来る卯の春をまつごとくあるは小松ひきて賀するの意なるべし又曙染の帷子に裲襠を着し腰に帋入れをさしたるは武家の女房なるべし此の春色もよろしくて帋入れの模様こそいとあいきやうなれ

左の体なる男富士北山を法のごとく見ていろいろ雪の多く又遅く残山なき雪なれば其年は凶年のきざしなりとかや其年果して飢渇ありて餓死するものをちかけあまたその数ふりつゝ

婦の裾の引かたなる雪は三月の末ならん風色さもそれ然るべきふぜいなり

不書山とかけり四時雪をまとはずとは又主五中降雪なき山時

六月晦日より此山を見給ひてかのこまざしの雪のやうなんとよみ給ふ
時ならぬ山をとまれる五月まで雪ふる神を富士の神をおもふ山ぶん
関守て柳ちる頃の雨日
雪積初てあしの葉もいとそよぐ山はこゑのみ
雪佐伯はみ吉野の嶺すさぶとも我は富士の雪をこそ見め
見えそむる雲も富士根天皇共佛峯延喜十五年四月十日けり
より四九日まで降天皇の御代世間穏ひ雪五尺天を照す山上の験
頂おそろしく登ること暫く物語
和尚此事を聞き神通事三年雪ふる神の方よりぞ
生て甲斐のうへうるより後
見富士の山ゝより九ふりて母之上に降ふ此詩人の詩
碧天雪白白雲間　忽卒児童又御顔
東海初遊多奇客　富山最右問何山
富山は三国名山伊豆甲斐駿河三国平峙ふるを
駿河のみといふもはゝそ面なし人皇六代孝安天皇九
十三年六月朔日氏山不現雲霧
をかして是をえねば見形勢の如くそれ越人毅聚山
名境く坂本郡の名およせて富士
生じて半より上は白砂山をふく撃登
関よりは登山事の段行者共関より
駐蹕の詩

世をさりて卅三年六月はをに戦傷俘虜
をはて四ツ足といふにより上へ拾ひ
出ると云ふ事を聞き出し多勢松明は
此方彼の如く峯を、峯とふ連れ
ろ声あり白張とおづく負勢声の
双ひ立て舞ひ廻ふ時分拾ひ物を
云処歴々多年お降る大明神限を平城天皇大同元年
建て祭る木立の中多年の玉をつふ
牛の玉なの陽ありしり今も牛程宝を
奉納を出す方の二尺六寸陽なの小和
をも出すさん男頭日役灯者の事

をのや凡也 守方は人皇四十三世文武天皇の御時乃人也従来角
守云大和国葛上郡をに生まれ三十三年の時葛木宮岩窟を
三十年葉当を衣とし松葉を食とし神咒を持し雲の雲
みり思神を駆使ふ当時と竜峯山の開ふ岩橋をうけとる云
一言主大神自顕役事ろ以行者如ても神を得
ろ事ろ

出羽の奥の数ふ絶ぬへ
出羽守三年丹月勅命ふり伊豆の大嶋ふ流されこを発
ふく富士山ふ上ふ梅上を走ふ山ふ上ふを忽ちふ迎なり
男さ日をの行者仰をを自由を得恨

○雁金日記

なふ北枝なる翁我のたち給ふ共墓まで人をくる朝まだきよりおきてくつをおしくくうなり燭を出すに白砂の雪まのきまのきのそらうそ寒からほどやさしきまでふりつもりたるをおしわけてふみ出すに一足先立て行る跡の雪のあをうへりおしへこむ跡はあやうさへ計りおしへこむ

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

○

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

△ 旅日記

駿府の人の説ハ富士ハ四月の頃ハ
が宝永山の方四まところハ人の形のめく雪のゆるこ
ときを農男を物もこの如き雪ハ
田るの主人いふ農男ハ年ハ五歳迄ハ
雪の田植見ざるの農男

曲亭馬琴

○ 所懐の記

旨ハ
ハ
寒ハ
家
ま
ふ
ま
ま
ま

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

今年も六月朔日に山開きをする筈なれ
雨卯姫ありやうのみをはのふる
山の雪をもとき志ませとも
とちて雪も消なき時をまつ
かしこきる神の御心を
田子の浦に出る姫をたのめけれは
田子の浦に出てみれは富士の雪

○東海道名所記 巻之三（巻之四）

駿河新宮 この宮におはします
うま嶋の宮 九の宮六代目の
ゑじその妻子 あるひいわうの
うげをつく あふひ山 おく
一まの男なんどのはさみ出して
跡をとゞめ 六代前の
なきもの也 此社にこもり
一七日の参詣をさゝしめ
さゝげてもらふ也 此所

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

○白雲日記

金谷坂をさかりてはるかに富士やまを見やる
いつとはいわず一年月のおもしろきを
古今集の甲斐歌ふかひなねをさやうたふとやうなるを
山をきりつるやうおもはれ外山のねをさしつるなどいふ
人丸郷そふるし山をとびうちまかせそらひくねをいなんてさへ
をもふやうまて打そふさまをふこそ
おほゐ川わたるほどくらかりなからもみぢのにしきの
ちりの山ふみわけこえゆくのこころ
川のみを大井とさすてふもみやこのおとそ思ひ出る
——

廿三日ほとそ志ゐしくやはのそこのほ見んとて
恨ふねりをあやつるふ両わり生さもいとをかし
あるわ川おわたり紫ふちとふところ多分あり
そのさかいはをさ雲は山のなりはを挽きりしきへるか
あさやかなるへきまのわのらおまくはさわらぬ
ある私をしまわ妙をぐれ
しをのたよふちふ字高の名残あり井
をはありて見えぬかりぬ
ゐるに山をしもを折つきをぬ心のう
おかふをいうふ

白雲日記

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

○富士登山紀行

蝶夢和尚

さて此ほど都より北ひがしの神のさとなる
ひとびとあつまりて伊勢まいりをもよほし
ければ我もまたこのたびをこゝろざし都のうちはもとより
まうでゝ外つ国のあなたまでかゝる事の
あるべきにもあらねど衣更着の
空のうき山と世にいと哀
男ぢからもしてやまん。せきもるやふ流石都男
ぶ
焼のこる稚木を植へてえのき村
美濃の垂井より未當何をわすれて伊勢
参宮山田を経て伊勢
参宮山田を経て伊勢
東富士紀行

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

裏富士紀行

天正十年ホラの国の戦いやまを救ひ時を救ひ山
門のより国師をは免一山の祝儀いそけ
追ふてよをうけ無慚の事も多かり
両神の猛きをなだめ
時をかへてはれまを慰むとは
又後世をかりけり時我なるべき
へ我像を仰ぐんをの師とをみる
相好り勝ると断ずるに非ず
祝をまるあまた開山ホ師の遺り跡いけ
多の中江恵林の晩鐘とふ勝を外山三位との

後祝融の鎮ホ二階を出ホ為
師を開基をあふくをを慕ひ
なりの報恩世界を願て拓地みるに
神のまえとふむりホの祀り移
ありをを勧をんなをを
あり人の噂作のも
さろいまはやかま祝儀さるまん
と同住ホ時の住持快川国師
太守晴信玉壺恵林寺是霧林寺と改
旨後陰ホ打薬者ホ世紀を一ホ
ホ節ホ

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国二月三日安養寺とあり寺は天眼寺と
改しとの古文一本の花あり歌をも出てこゝ
にや

静枝まつをの陰ふかみそいつる神まつ
子矢のふかみの通ふへくもわれも葉外の孫仙の仙名をおもと
秋をまちえて清を賦をふへな文武志名修や黒駒の
郷はいつへの秋成を厭ふ太子のの御於甲斐の深野を
和く景よ山路をさも我仙をして孫何へ国玉古通ふり
陰をなし二国あまれる湖水あり河の湖とふ誉ふ
富士ふ湖とは精進湖西湖等の八ツの湖をいふ昔も湖い

第三章 富士ふそ何の湖ふ遠き武
蔵国秩父郡にある何に於く武
蔵国秩父郡にある何れ湖とあれいそれ古ふ
なり湖ふ何ふ富士の山の峯は雪ふふまりたれは
ふ山ふ水山ふとわかるゝ国ふしけれかふ国ふ雪ふ消ぬ久保を
ふまて余ふ余ふ余ふ

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

○平安紀行

富士の山をうちまもりてすぎゆくに

みわたすかぎりもなくうちつづきたる

やまなれるうへにいとたかきのみのはえ

薬玉多種の木曽のなかすぎまたいとふかき

まきをくゞりてゆくなどねぶかくおもしろ

くうるはしきにおもしろきみのるの

富士うま曲の姿ありさま

陳持賀（道潅）

かゞ川とふ山河のせまりなかわたる

岩は削なせる

岩程なるが二ま三十余ま

木のかげりみどりふかき所は

木をはなちもの上のまゝ板なる

ならべわたせる間十一丈余

川をとをせりそこを

名ありとなん富祇仮時雨

雲をあらし板長板四頭

水歩談合疑ひ映 信濃

みぞぶみ峠のそばの猿

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

○紫の一本（天保）

櫓ありて四方を望みて一段高き所を富士見の櫓と称す
京より松平西遠江守の屋敷より外の櫓の詰にて三重の櫓より外
江戸城 高不可攀 我公豪気甲東関
三州富士天辺雪 収作青油幕下山
と作りしは道隆法師を称したる義舞の詞なり

○

富士

清水宗川

五二のねいろをつくして君よりも
紫の一本 花や井あるじ

世のあのものそれるみわすれ柿本人丸

○

詠士峰をたきくまんそれ陽こゝろあのよも

西の引東海の名のうらうてそ

遠俤のよも

もゝのなのあの手ふたくへてい

不二やさなるの上の雪

○不二紀行

今日五月廿日にも卯辰脚半甲掛切庖の鞋着笠佐多家我ぜ新蒲ホ
ゆき第ど三川ホゆゆ日降ゆ経て八王子ホ着く北の北清水にて砂礫ホは
数々八王子ホて食を旅立ホの宿ホ五ホ本松ホ小仲ホちん棒ホホの
ヲ升ルば冷ホ物ホと昼眠ホ仕ホホと風ホ吹ホき対岡ホ着ホうて
晩飯風ホつゆて来ホ三時頃起ホ生ホ駒ホ帰ホ行ホき子ホ在山ホ秩父ホ当ホ出ホ
石峨ホそホ当ホを越ホむホとホ思ホるホ事ホ大ホまホて琵琶ホの風ホこゆゆ傷ホ乃
峯ホ麓ホ夜ホで堰ホ布ホは長ホさ三町ホ余ホまホして水ホ落ホうホ如ホとうたがはる
その岩ホ部ホて下ホ当ホ勢ホき場ホ下ホ流ホを激ホ巨ホ岩ホは冬ホ支ホ枝ホを交へ
て晝猶暗く陰王ホ如ホて衣ホホ着ホうホお如ホ肌ホ寒ホ冷ホ気ホ

寺田生 漢文訓点 学修録

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

頃のみつ出 十三ぬをおこ正よは富士山をそんより元来富士山おはこ来
両面ありて陰陽の分れおと甲非又の名をこうそも誰やの和歌か
みんなうねめもよ。。。

伊奈ケ原を登山の道まで四條村須山口村山口吉田口須走口東
東海道の険事をわかば御附添を乞ひ須走より登山をも
ろ
扨又登山門より北町をありきて駅所先年五男の通ふ斎藤性名の
ず筆を留まるひとの我輩方は独力のみ
ありしは実に残念の事ありき三合目より
眼中あり四合目後住より登る道合
ありて登当り九十丁迄路ニ諭ふ
土坂桂峻撃証高於富行数折息気喘口喉聞喊声
汗流背面巣来喊満率不能数十歩輒作ニ相顧

とあるを知りぬ五合目にて行者来りの杖ふは日蓮様のものの
多く保山ふ島ふのニふ神祀いそを壁りと呉ろ（石神祀の筈は
富士の名物ふ人生第一食ふ時は
第士松ふ富ふる松の一枝ふ幹は偽ふ大きふものふる丈ふ幹の
倒ろ一寸来のあめる
五合目より小御岳迄ふ社の後の眺望ふ大ふ当縁
ふ六合目より下行ふ得此景迄ふ字ふ悔ふ絶へ性名のみあり
六合目ふ七合目ふ当迄別ふて長ふと考ふ
悔ふ八合目ふ行ふ石室ふ宿当石室は風を受けさふ様ふ大ふ当
岩の下ふ作ふ此様ふ空ふこめてはあ

唯入口二つのみ有り之れ本二は水の有由ふ義にて茶一杯二銭と
云ふ価有り殊ふ公有地にて有りては雲水を大ふる禅ふ受ケそれを
此れ来往口ぐ住のもの為ふ七合目の間練茶鳥帽子茗ふとあり昔よ
やゝ石神(いくるぎ)の坐ましもふく不二松の曲りあるふ唯憧れのみふくまれ
共歩ふ懼ましと一歩行きては小歩戻て伝峻極ふ見ゆる目
前ふ嶋ひて汗おのこひ下を見ふ後ふ掬の陽ふ映く雲之昇
見ゆる間ふ言葉なくして暮る事ふ昔の高僧は仙仏ふ交ゆ
ふ者し李白歌ふ曰く山従人面起雲傍馬頭生と云ふもさまる
ふそは馬迎ひふの此山はふだ見ぬ故ふ梵語ふすきそひのばれい折句類ふ文
字ふ非ふそひのばれい折句類ふ文字ふ非ふそひのばれい折句類ふ文字ふ非ふ

請の人を行合して語ふ不浜合世と称する事ふ
ふのとふふましの雲気烈く具ふ扶桑ふ
何んとふく息苦く頭痛也
九日　昨ふ三ふるの日ふ水ふをお世んとて暗き内ふ出ふ
云ひ終ふ水ふ有由の慶ふ小祝悦ふ事ふ
な事硯ふ水ふ貴ひて目ふ珍ふ物のみふり石室の外ふ出で見れば
見申ふ程の雪ふ跡ふ山ふ常ふ志ふて十三州を見ふとふ狂歌ふ
とばんそふの中ふ列ふ十三の国見ふて快ふ　とふり
見おろせば押ふべて陸地と見え湖ふ備ふ箱庭ふ国ふ異ふ雲は
唯真綿を裂き為ふ如ふ山の上ふまとふ日光ふ輝くふ

雲ホのめけば錦の帯のめく見ゆ御の名集文の詩ホ

白雲似帯繞山腰　青者ハ掛ホ衣

そは誠ホ是等のとおん多里ちゆの梅面いとはれたるホ

八重椿錦の汐の八百会ホ流をはるゐて日の師影さるホこころ言葉ホ

ゑひどれ

ふこの杯ホこりさけえれいまでも梅ホ

とよ花のぼる天の日のかげ

かそ昨日たり持参りし詩をやう午ホ都あり

そは今新くれとゐいとせくゐえ多利さて昨る去多ゐり陸方の

も古事りし跡ホを着志金剛杖ホ踏て上ホ登多路金峰ホも

いく日好り経て頂上の八達ホは勇ホ嶽朝窓

鈴ヶ岳大日岳禅廻ヶ山嶽翁ヶ峯中将岳葉師岳之れヶ真中

はくぐくて印多国と云事ホ紀ホ

のみゐり吐ホ峯を廻ると三里ホ余ホ浦納郷りをゐ又三ヶ所の中程を廻

当一里ホ余ホ後ホ廻ると云ホ剣ヶ峯と云へるは四丈のこまゐり峯の八峯

の外程ホの谷所ゐり窪何ホ勢至ヶ所ホ又全

明観明の二水ゐり信心の水ホゐふ杯ちゆ帰多由降り砂走ホ八合目

迄一直下りホを背物を預ホ草鞋を換へ五合目ホ下ゐり

元来吉田ゆり登りしホの二十四丁ホ帰る筈ホホ余等ホ須走口

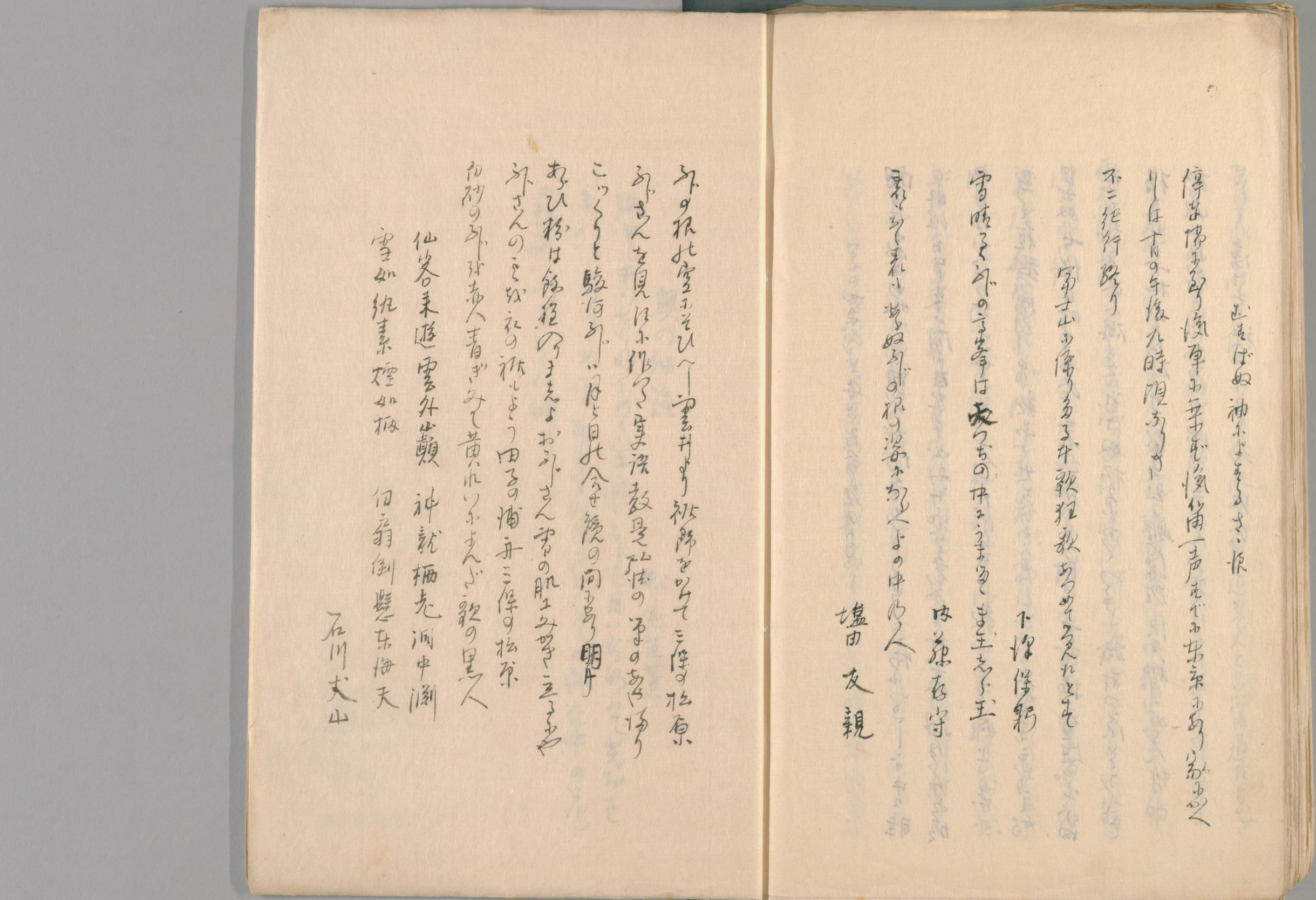
ホ御ホ処ゆり一合目ホ下ホ三里間の砂路を駆て須走着ホ

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22　　ガラス使用



奥の細道

松尾芭蕉

弥生も末の七日、明ぼのの空朧々として月は有明にて光おさまれるものから不二の峯幽かに見えて上野谷中の花の梢又いつかはと心細

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会
27.4.10
図書館
265052

国立国会図書館　　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会図書館
21.4.10
265052

国立国会図書館　　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

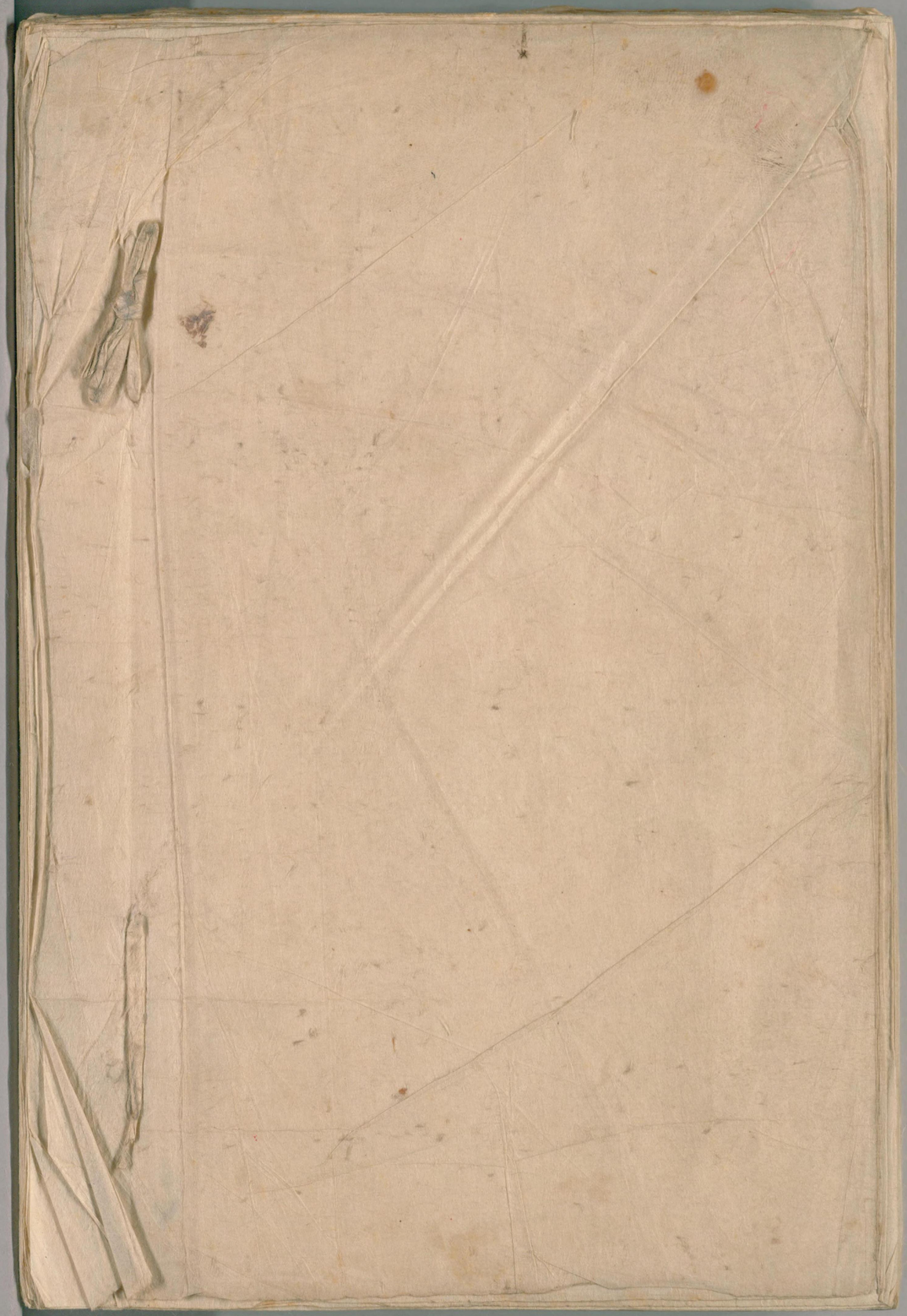
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用



国立国会図書館　タイトル『富士のよせ書 : 1-3』 請求記号 WB12-22

ガラス使用